

遊びの充実を図る保育環境構成について

椛島 香代*・尾田 芽衣花**・安達 祐亮**

Key Words : 幼稚園教育, 環境構成, 保育者の役割

I はじめに

幼稚園教育は、環境を通して行う教育を基本としており（文部科学省 2008）幼稚園全体が幼児の生活の場であり学びの場となる。身近な自然、様々なもの、様々なひとにかかわって幼児は体験を重ね成長していく。また、遊び、片付け、昼食、着替えや排泄・手洗いなどのそれぞれの場面が連続しており一日の幼稚園生活そのものが学びの時間となっている。それ故幼稚園教育においては、幼児が幼稚園で過ごす場所や時間などすべての保育環境が重要なものとして位置づけられているのである。

幼稚園の環境は幼児の実態や季節によって変化している。この変化は、主に保育者によって構成されることによってもたらされる。幼児が適切な体験ができるよう環境を整えているのである。保育者は、幼児の学びを保障するために保育環境を構成する役割を担っている。環境を構成する時の留意点として、幼稚園教育要領解説からは以下のような2点がまとめられる（文部科学省 2008）。

- 1, 幼児自らが意欲をもって積極的に周囲の環境にかかわっていくこと、すなわち、主体的に活動を展開すること。
- 2, 幼児が望ましい方向に向かって発達していくこと。

いずれも非常に大きな視野で示されており、実際の保育にあたっての具体的な手立てのヒントになるとは言い難い。保育実践では、保育者は幼児の実態を把握し保育計画のもと具体的に環境構成していく。実際に行われた具体的な方法を検討することによって初めて保育者の保育環境構成の妥当性が評価できるのではないか。本研究では、実践事例分析を行うことを通して

* 人間学部児童発達学科

** 文京学院大学ふじみ野幼稚園

保育環境構成に留意すべき点や具体的な方法を明らかにしたいと考える。

Ⅱ 分析対象事例の選択方法について

保育環境構成について検討する際、前述の幼稚園教育要領にあげられた環境構成の留意点と関連する事例を選択する必要がある。共同研究者である保育者に保育記録の中から以下に示す観点から事例を選択してもらった。

- （１）幼児が幼稚園の環境に主体的にかかわっていく過程がよみとれる事例
- （２）遊びの中でねらいを達成していく姿、すなわち望ましい経験をj得ていることがよみとれる事例

次に、研究会を行い持ち寄った事例を検討し、保育実践者以外の共同研究者が客観的に事例を読み分析対象として妥当な事例を選択した。

Ⅲ 幼児の主体性を引き出す環境構成

幼児が主体的に行動できる環境とはどのようなものか。ここでは、入園当初の3歳児の事例を分析して考察していく。新入園児は幼稚園という新しい環境に慣れ親しむことによって自らを発揮することができるようになる。主体性を発揮し始めるまでの過程を丹念に記録した事例を分析することによって、幼児が主体性を発揮できる環境構成について考察していく。

1. 3歳児（12月生まれ）女児事例（尾田）

<3歳児学年4月のねらい>

- ・園生活に慣れ、できることから行う
- ・楽しいと感じる遊びに出会う
- ・保護者と離れて過ごす
- ・保育者に親しみを持つ
- ・ゆるやかな集まりの活動に触れる

4月10日～13日の状態：登園初日には笑顔で登園し、粘土や絵を描いて遊びに集中していた。しかし、2日目から母と離れる時に涙を見せた。朝、他児が室内遊びを行っている時にテラスに座り、「お母さん、見てる。」と園庭を眺めていることが続く。保育者に対して拒否的になる時もある。一方で積極的に声を掛けてきた子や顔見知りの子とのかかわりで気持ちが切り換わり、笑顔を見せて遊びに入ることがあった。遊びに入ると集中して行っていた（粘土・お絵描き・シール）。また、園庭に出るなど環境が変わった時にも気持ちが切り換わり、遊びに入れていた。

留意点：入園直後で人間関係が成立していないので、幼児がそれぞれ一人で遊び込めるような、

粘土やお絵かき、シール貼りのコーナーを設定した。対象児については、信頼関係を形成するために朝の受け入れ時のかかわりを大切にした。一対一のかかわりを丁寧なことから始め、拒否的になった時には本児の気持ちを尊重しつつ興味のもてそうな遊びに誘った。遊び始めると集中できる姿があった為、遊びに興味を持てるように目に付く場所にコーナーを設けたり、興味を向いた時にすぐ行えるようにスペースや材料を十分に用意したりした。これらの遊びに、共に参加し自分の作った作品を保育者に見せたときには、「すごいね」「上手だね」など積極的に反応を返すことにし、対象児の満足感につなげたり保育者との信頼関係を構築したりできるよう配慮した。

保育者との関係ができてくると保育者の後を追い、遊びに参加せず傍観的になったり、遊んでいるように見えても目では保育者の姿を追っていたりと集中できない日もあった。安心できるように保育者の側で過ごせるように配慮した。

保育者から離れて安定してほしいという願いがあったため、興味のある遊びを見つけられるよう、積極的に遊びを提案していった。また、友だちとのかかわりで安心できる一面も持っている為、気の合う友だちのいる遊びに誘い自然とかかわれるようにした。しかし、友だちの中に入りながらも保育者の後を追うことが多かった為、この時期は保育者との一対一のかかわりを十分に持つことが必要であった。

4月24日～5月末の状態：身支度完了まで室内で母親に見守ってもらい、泣かずに離れられる日もしばしば見られてきた。ままごとコーナーに興味を持ち始め、コーナーで遊んでいた子の近くへ行き、エプロンや三角巾を身に付けて同じ空間にいることを楽しんでいる。また、新しい遊びに興味を持ち「やってみたい」と積極的に参加する。保育者を振り所にしながままごとや新しい遊びに参加することができた。また、保育者の存在があることで遊びの中では友だちとかかわることも見られるようになった。徐々に保育者から離れて自ら友だちの中に入って行く姿が見られるようになった。不安定な日もあるが、友だちの様子を見て自分で気持ちを切り換えて遊びに入れるようになってきた。

留意点：ままごとコーナーにて友だちとのやり取りを楽しむ姿があるが、保育者の介入がないと遊びが終わってしまう為、保育者が中心となり、遊びを展開するように努めた。ままごとコーナーの盛り上がりもあり、ままごとコーナーの遊びが様々な方向へ展開するように環境を設定する。食べ物の描かれた絵本を近くに並べる、毛糸などで作ったものやはさみを使って一回切りしたものを食べ物に見立てられるようにするなど幼児の遊びのイメージが広がるようにした。

6月4日～1学期末の状態：登園時、母と泣かずに別れられるようになり、身支度もスムーズになってきた。登園して、エプロン・バンダナを身にまとうことが決まりのようになってきている。ままごとコーナーに留まらず、様々なことに興味を持ち、エプロン・バンダナを身に付けたまま遊びを転々とする。集中できない様子ではなく、エプロン・バンダナを身に付けたことで普段の自分とは違う自分になりきり、行動することを楽しんでいるように思える。

友だちとの関係も広がった。一対一からのかかわりから、3～4人で行動するようになる。一緒に行動することを楽しんでいる様子である。

留意点:本児がままごとコーナーに興味を持ち始める頃には、他児も興味を持ち、ままごとコーナーが賑わっていた。その影響もあり、混み合い過ぎてトラブルの原因になったり、遊びが中断したりしていた。そこで、コーナーの位置を変えずに、向き・配置を変えると広い空間が取れた。物の出し入れがしやすくなり、数人で机を囲んで誕生日会ごっこなどを行っていた。配置を変えるだけで遊びに広がりが出たり新たな友だち関係が生まれたりすることを実感した。対象児も遊びを楽しみ、「みんなー！」と声を掛ける姿が見られるようになり、遊びを提案することも出てきた。この様子を受け、考えながら遊ぶ楽しさを感じられるようになったととらえ、保育者は徐々に遊びと一緒に参加することを減らして見守っていくようにした。

2. 主体性を引き出す環境構成とは

この事例における保育者の環境構成に対する配慮について以下のようにまとめることができる。

- (1) 遊びが見つけやすいよう、目につく場所にものを設定する。
- (2) 幼児が一人でも参加できる遊びの種類を多く設定する。
- (3) 遊具や材料の量を多くする、人数によってスペースを変えるなど幼児一人ひとりが自分のやりたいことをやりたい時にできるようにする。
- (4) 不安定な幼児、ものを見ただけで遊びを始めることができない幼児に対しては、保育者が一対一でかかわり保育者を拠り所として遊びに参加できるようにする。
- (5) 始めた遊びを十分に楽しめるよう保育者も一緒に遊んだり、遊びをリードしたりする。
- (6) 遊びを楽しんでいる幼児に対しては、保育者は遊びの様子を見守り不安定になった時、できないことがあった時などにかかわるようにする。

幼児の主体性が発揮される環境は、まず幼児自身が環境について理解しやすいように配慮されていることが必要である。よく見える場所に遊具や材料が用意されていること、その場で何ができるのかがわかりやすいように置かれていることなどである。またこの事例から保育者の存在も人的環境として重要であることがわかる。初めは保育者に対して親和的ではなかった対象児が保育者に気持ちを尊重してもらい、自分がやりたいこと、好きなことをよみとってもらい、そばにいてもらうことによって保育者に対しての信頼関係を育み愛着を形成し、後追いをしている様子が記録されている。保護者に代わって保育者への愛着が形成され保育者を心理的基地としながら徐々に遊びに参加できるようになっている。保育者はこれでよしとするのではなく、対象児が自ら行動できるよう援助を継続している。物的環境を工夫することで対象児が遊びに集中できるようにしたり、対象児の状態をつかみながら徐々に見守ったりなど遊びの中で保育者の存在感を減らしていく努力をしている。

保育者は幼児が「意欲をもって積極的に」「主体的に」過ごしているかどうかを見極めている。

意欲や積極性、主体性はいずれも人間の内面の問題であり、これらを評価することは極めて難しい。その人の課題遂行の状態を観察しその取り組みの様子から判断せざるを得ない。保育者は、幼児の行動を通して内面、ここでは意欲の状態を評価することを求められているといえる。それは幼児が何をしていたかのみならずそれをしてきた幼児がどのような心持ちであったのかということをもよみとることである。そのため保育者はまず、幼児が遊びを自ら選択することができるかという点で観察し、次に遊びが持続しているかという点で観察する。持続しているということはその遊びにおもしろさを見出し、意欲をもって主体的に取り組んでいると判断できるからである。自分のやりたいことを持ち、それを始め、始めた遊びにおもしろさを感じ継続することができるよう配慮する。その際、幼稚園という環境に対する信頼感、保育者に対する信頼感を育み、また損なうことのないようにする。幼児の環境に対する適応の状態や、習熟度に応じてものの種類や数量、置き方などを工夫するのである。

IV 幼児が望ましい方向に向かって発達していく環境構成

幼児が望ましい方向に向かって発達していくための環境構成について考察する。幼稚園教育は遊びを中心とした指導を行うため、それは遊びの中で必要な体験を積むことである。望ましい方向は、保育者によって指導計画のねらいに示される。ここでは、幼児間の人間関係を育む環境構成、幼児が遊びの中で互いに共同する環境構成について取り上げ検討する。

1. 4歳児グループの事例（安達）

< 4歳児学年 11月ねらい >

- ・ 友だちとの違いに気付く
- ・ みんなで行うことの楽しさを味わう

< 4歳児学年 11月第2週ねらい >

- ・ なぜそうしたのか友だちに理由を伝える

海賊船ごっこ: 4歳児クラスの幼児が、園庭の遊具（ロンドンバス）を海賊船に見立て、海賊ごっこが数日にかけて展開されていた。メンバーは、それまで親しかった仲間ではなく、H男、K男を中心とした新しい仲間と遊んでいた。園庭の遊具（ロンドンバス）が海賊ごっこの拠点となっており、メンバーが遊具を占拠している状況であった。それまで、年少児が中心に使っていた遊具でもあり、他の子が使えない状況でもあった。

留意点: 担任は、このごっこ遊びが継続して展開されていたこと、メンバーのH男が新しい仲間関係を築いたことから、H男を取り巻く仲間関係が安定するまで遊び込めるように、この遊びが継続して展開されるよう支援したいと考えた。しかし、遊びの拠点は別の場所で展開させたいと考えていたところ、雨の日をきっかけに室内に海賊ごっこの拠点を移すことにした。まずは、子ども達が海賊船として見立てられるものを用意することが、室内でも海賊のイメー

ジで遊ぶきっかけになると考えたので、海賊船づくりの材料を用意した。

遊びの発展：保育者は登園後、すぐH男を誘い、ダンボールとビニールシートで舟を作り始めると、他のメンバーも集まり始め、すぐに子どもが5人程入る大きさの海賊船は完成した。海賊船が完成すると、それまでの海賊ごっこで遊んでいたイメージがあったからか、「酒を作ろう」「剣が必要だね」など、子ども達からアイデアが出され、海賊船からイメージするものを作り始めた。酒や剣などの製作が落ち着くと、海賊船を拠点にごっこ遊びが展開されていった。

複数の子どもたちが入る大きさの海賊船を作ったため、廊下に海賊船を置くことにした。廊下に目立つものがあることで、他の子ども達の興味を引き、今まで海賊ごっこをしたことがない子も参加をするようになった。当初の「海賊船で探検に行く」イメージだけでなく、大砲や剣を使ってたたかいごっこをしたり、船内でごはんを食べるなど新しいイメージの遊びも展開されるようになった。H男は、自分の好きな遊び、自分が楽しいと思っっている遊びであった海賊ごっこがクラス中で流行ることで、自分から同じ遊びをしている友だちに声をかけたり、遊びを積極的に展開することもあった。また常設できるような海賊船を作ったことで繰り返し遊ぶことができ、初期のメンバーのイメージだけでなく、他のメンバーから出た新しいイメージの遊びも展開されるようになった。

クラスに目立つ海賊船があり、それを拠点としてクラスの子どもたちが遊んでいると、他クラスの子どもたちの興味も引き、他クラスにも海賊船が作られるようになった。

2. 子ども同士のかかわりを生み出す環境構成とは

11月のねらいは「友だちとの違いに気づく」、週のねらいは「なぜそうしたのか友だちに伝える」というものであった。これらのねらいを達成するためには遊びの中で友だちとかわる機会を多くもつことが必要となる。この事例では、ねらいを達成するために保育者が以下のような点から環境を構成している。

(1) 幼児が少人数で遊びを展開できるような場所（拠点）を幼児が場に対する愛着が持てる形で設定する。

(2) 遊びの拠点には幼児の遊びのイメージに合わせて使いやすい教材を置く。

(1) では、初めに遊び始めた場所が他学年の幼児の遊び場として重要であったため保育者としては別の場所で遊んでもらいたいと考えていた。幼稚園では幼児が様々な場所を使って遊びを展開するが、安全面や他の遊びとの関係で場を調整することは必要であり、幼児たちも少しずつそのことに気づき自分達でも調整することができるように導いていく。事例でも新しい場に誘導している。その際、保育者は幼児が始めた遊びの楽しさを十分経験し遊びのイメージが明確になるまで待ち、雨が降ってたまたま遊べなくなったことをきっかけに新しい場に誘導している。さらに(2)に示したように新しい場所でこれまでの遊びがさらに楽しくなるよう教材を用意してすぐに使えるようにしておき、その場に対する愛着を持てるよう配慮している。

幼児は保育者があらかじめ計画していた環境の使い方をするとは限らない。保育者は、幼児が園内の場所をどのように使っているのか、何をしたいと考えているのかをとらえながら環境を再構成する。この事例でも、年少児が中心になって利用する固定遊具を年中児が拠点として使い始めたことに対してすぐに移動を促すのではなく、雨天であったことをきっかけとして新たな場所を提供している。場に対する愛着を大切にしつつ、より望ましい経験ができる場へと誘導していく。

あるグループの遊びの拠点が魅力的な場合、他の幼児の刺激にもなる。事例では「海賊船」である。新しく仲間入りする幼児が出てきて新たなかかわりが生まれたり、イメージが広がったり、また別の場所に自分達の「海賊船」をつくる幼児も出てきている。環境から刺激を受けながら幼児が主体的に遊びに参加する姿が見られている。また、遊びの中で友だちとかかわり、人間関係についての経験を増やしている。保育者がねらいを明確にしつつ幼児の遊びのイメージを的確に把握し環境を構成することで幼児は望ましい経験を重ねることができる。

3. 5歳児グループの事例（安達）

< 5歳児7月のねらい >

- ・みんなで生活していることを知る
- ・自分なりのめあてをもって遊びを進める
- ・友だちと相談しながら進めることを楽しむ

< 5歳児7月第1週のねらい >

- ・友だちと協力しながら動く
- ・みんなで生活するためにきれいに保つ

6月初旬：他クラスとの教材の交換があり、それまで保育室にあった大型積み木が他クラスへ行き、ままごとセットが来た。それまでは、大型積み木を使って遊びの場を作ることが多かった。教材の交換以前にも、ままごとの道具を遊びに必要な道具として、他クラスから借りてもってくることはあった。5歳児では、ままごとセットの道具は玩具ではなく、陶器の皿や本物の鍋など日常生活で使うものを使っている。子ども達は、粘土や水を使ったり、石鹸をいったり泡立てるなどして思い思いに料理などを作る過程を楽しんでいる。親しい友だちと自分たちの遊びの場所を作り、保育室だけでなく廊下やバルコニーなどに必要な道具や材料を運んで遊んでいる。

留意点：保育室の環境が変わっても遊びの拠点を作りだし遊びが継続できるように、大型積み木以外のものを使う方法を紹介する。新しく来たままごとの道具を活用してごっこ遊びを盛り上げていく。

7月初旬：この頃親しくなった、T男、R男達も保育室や階段に自分たちの遊ぶ場所を作り、遊んでいる。登園後から、R男を中心に自分たちで机やイスを用意し、保育室の一角でままごと遊びが始まった。親しいメンバーが集まると、T男からレストランのイメージが出され、客

用のテーブルを用意した。客に出す料理を作り、それぞれが「これはメロンソーダ」「カレー」など自分の作ったものを紹介し合っていた。

ある程度料理ができると、近くにいた保育者を招待した。「ここレストランなんだ」「何食べたい？」と子ども達。保育者はメニューがないことに気づき、そのことを指摘した。するとすぐにメニューを作ることになりレストランは一旦閉店する。看板のイメージがなく、保育者が必要な道具を用意し、「ここに看板も置いておく」と伝え、子ども達が看板を作り始めるかと思ったが、保育者の作りかけのままの看板がそのまま、看板となり、店名も「かんぱんや」となる。店名ができたことで、チラシを作り始めた。再び開店し、クラスメイトを客として呼ぶ。メニューが出来たことで、客の役割も明確になり、やり取りがスムーズになっていった。レストランのメンバーの役目も板につき、「おれ作るから」「皿洗ってくる」など、自分の役割をみつけ、遊びを進めている。次第に役割も固定化され、作る係、注文を聞く係、皿を洗う係などの分担ができていった。

片付けの際に、H男が「明日はお金を作ろう。おれ、家でいっぱい作ってくるから」と言った。さらにイメージが広がったようである。

留意点：保育者は、R男達が親しい友だちとレストランという共有のイメージを持って遊んでいるが、今後この遊びが発展するためには、店員や客などのかかわりが必要になると考えられ、他児とのやりとりが生まれるまでの遊びになるためには、現時点では遊びの目的が他児から見て不明確であると判断した。また、7月第1週のねらいである「友だちと協力して動く」というねらいを達成するためには、この遊びがある程度の時間、継続される必要があると判断した。

そこで、客として参加して幼児のイメージを引き出したり、看板にできるものを紹介したりしてレストランというイメージを明確にし、継続した遊びに発展するように援助した。特に看板は、子ども達が店名も考えることを期待したかかわりであったが、子ども達の興味はメニュー作り、料理作りであり、保育者のねらう展開にはならなかった。しかし結果として、保育者のつくりかけた「かんぱん」という文字が店名になり、チラシを作ることに発展し、さらに他児とのかかわりが生まれるきっかけとなった。

4. 子どもの協同を生み出す環境とは

幼稚園教育要領においては共同して遊びを進めていくために「自ら行動する力を育てるようにするとともに、他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにすること（文部科学省 2008）」と示されている。事例では、保育者がレストランを開店するために何をどのように準備し、参加する幼児がどのような動きをすることが必要か考えさせようとしている。まとめると以下ようになる。

- (1) 幼児それぞれの遊びのイメージを言語化する機会をもちお互いのイメージの共有を図る。
- (2) 保育者が遊びに参加することで幼児に様々な役割があることをモデルとして示す。
- (3) 遊びに必要なものを紹介したり、提供したりする。

幼児はグループで同じ場所で遊んでいたり、「〇〇している」と活動名を共有したりしていても個々の考えやイメージは同じであるとは限らない。あらかじめ「何を」「どんなふうに行うのか」を決めてから遊びを進めていくわけではないのである。従ってそれぞれの思惑がぶつかりあったり、うまく伝わらなかったりすることがしばしば出てくる。保育者は、遊びをより楽しくするために一人ひとりの動きを観察し、何をどのようにしたいのかイメージをよみとる。そしてお互いの気持ちや考えが伝わるように仲立ちをしていく。また遊びそのものが発展するよう必要なものをつくりだせる材料やイメージを具体化する衣装や小道具を提示していく。

ここでは、ものの種類や置き場所を工夫するだけでなく保育者が遊びに参加して必要なものや役割を示し、幼児のイメージをより明確にしお互いに声を掛け合いながらレストラン開店の準備を進められるように援助している。保育者が遊びを盛り上げる人的環境として機能している。遊びの中で幼児が協同していくためには、他の参加者が何をしようとしているのか知ろうと関心を持つ、お互いの気持ちを理解する、目的を同じにする、遊びの内容や手続き、ルールなどについて相談する、など行っていく必要がある。保育者は幼児の主体性を認め育むためにできる限り指示したり主導することは避け、幼児自らが気づいたり考えて行動できるよう働きかける。それ故遊びにかかわるときの保育者のかかわり方は重要である。保育者は人的環境としての自分を意識し、居場所や遊びにかかわる時の役割や行動をねらいとの関連で留意していかなければならない。

V おわりに

保育者は幼児が主体的に活動に取り組み、活動を通して幼稚園教育のねらいが達成できるように保育環境を構成する必要がある。保育者はねらいを設定する際に「望ましい方向に発達する」ことを具体化しその援助を検討する。幼児が日々の活動を経験する中で、ねらいを達成できるよう、すなわち望ましい発達を促していく。それは遊びの充実を図ることであり、幼児の遊びや活動を通して得た経験は何かを理解することでもある。計画された環境構成は、幼児が望ましい経験をえられるよう保育者が配慮したものである。幼児は自ら遊びを選び、充実感や満足感を得て継続して取り組もうとしているのだろうか。その遊びを楽しんでいるのだろうか。遊びの中でねらいを達成できる経験を得て成長しているのだろうか。保育者の環境構成の妥当性を検討するためには環境にかかわる幼児の姿を理解することが欠かせない。また、保育者は遊びそのものへの援助もしなければならない。望ましい経験をするためにはある程度遊びが継続していくことが必要である。例えば、同じ活動を何度も繰り返すことで、新しいアイデアや、技能の獲得につながることもある。また、友だちとやりとりしながら遊びを進めている場合、遊びについてのアイデアや意見を友だちと出し合い、それを調整する経験を深めるためには遊びそのものに対する意欲が高く、友だちとのかかわりを継続していくことが必要となる。保育者は、遊びの状態をみながら必要に応じて幼児にかかわっていく。園内の物的環境を整える

だけでなく、人的環境として自分自身の居場所やかかわりについても吟味しなければならない。子どもの遊びにどのようにかかわるのか、新たな物を追加する時になにをいつ提供するのか、など遊びに対する援助をしていく。保育者は、物的環境を構成するとともに、人的環境としての自分自身を意識しながら保育実践を行っているのである。様々な場所で様々な活動をしている、また遊びの中で幼児が経験している内容が多様であるというところに幼稚園教育の特徴と難しさがある。保育者が保育環境を構成する時、その妥当性を検討したり、遊びを理解したり、遊びに関わったときのその援助の妥当性を吟味したりすることぬきには幼児の望ましい成長を支えることはできない。今回は、3つの保育実践事例を抽出して環境を構成する際の保育者の留意すべき点を導き出した。今後も継続して保育現場の実践をもとに保育環境のあり方を検討していきたい。

引用文献

文部科学省（2008）「幼稚園教育要領解説」：フレーベル館

参考文献

青木久子、磯部裕子（1999）「教育学への視座」：萌文書林

椛島香代・小林由利子・齋藤麻紀子・平山許江（1995）子どもをよみとる（1）～幼児理解に関する今日的課題：日本保育学会第46回大会

椛島香代・小林由利子・齋藤麻紀子・平山許江（1996）保育者による子どものよみとり～保育者記録の分析を通して：日本保育学会第47回大会

椛島香代 原田育美 椎木奈津美（2011）「保育記録にみられる保育評価の実態」：文京学院大学人間学部研究紀要

近藤充夫、椛島香代、宮上悦子、平山許江、山田りよ子、溝口綾子（1990）一人ひとりを生かす保育～意欲を手がかりに子どもをみつめる：東京学芸大学教育学部附属幼稚園研究紀要

文部科学省（2008）「幼稚園教育要領解説」：フレーベル館

小川博久（2010）「遊び保育論」：萌文書林

齋藤麻紀子・椛島香代・小林由利子・平山許江（1995）子どもをよみとる（2）～実際例の検討を通して：日本保育学会第46回大会

（2012.9.25 受稿，2012.10.3 受理）